



富士山道知留辺

都留文科大学附属図書館所蔵



不二山
道知留
邊

松園梅彥輯

柳下陽眠閱

玉蘭齋貞秀畫

青山堂壽梓



萬仞之峯高
礪身生世界
看山大若教
地肖人形渠是
溪中一小塊

惟一齋佐藤垣

鮮澤書





富士山道知留辺

九例

一 此書山中の条内此山の本乃と先
とつ尺乃と後小記せし順略を見
安くせんが流るなり

一 北吉田口と細記一南大宮口は須山に
須山口と畧記せしハ注より
北口を記す其の支有あり東南の
方ハ次第篇小くしき著きべし

一 山中神松其地名ふくくし標出はと
又とも系亭或ハ宝穴小屋小安
並せしハ亦一まて下けて今記ハ
國中と中小一乃論地名神林ホと

一 要記とと以ども標は初うら取田
俗畔なく方位を正しかどつて頃
踏ま降つて織紀を項上胎内吉田秋の
如きハ越圖は細りかどれを初は出せう
表口費と及重切不動等と中乃の
初ま入且人穴而系勝を大宮の次ハ
出せしハ順略は序入のハ八海巡の次ハ

一 地名をあらうめんが流るなり
東海の便利は序ハ甲別をよるは
と東海乃大山乃を序るはとを
小思う乃を出せしハ唯表岐の疑惑を
解せめんかゝるなり又性集の小村

一 地名をあらうめんが流るなり
東海の便利は序ハ甲別をよるは
と東海乃大山乃を序るはとを
小思う乃を出せしハ唯表岐の疑惑を
解せめんかゝるなり又性集の小村

各所古跡もその名多き八とせし上
るといども其来歴も又も用あけ
是ハ之を界りて

一 國中房身と方よ挙ふ

宿次 ○ 村 ○ 川 ≡ 橋

神社 門 松園合 山 湖 ○

等々

今次編の発見を待て是は流さ
と合せざるべし

富士山道知留邊前編

江戸 松園梅彦輯

白子 柳下徳次郎校

折富士山の天地開闢以来事物せり出

子の根元なるかたより自り五行のす徳備

その他に異揚る所の神嶽ふしてふ云

双の靈山といつて一人皇六代

孝安天皇九十二庚申年雲霧性晴れ

月小雲つて國中のま穢掃て奉拜せし

と仰て庚申の年と縁年と稱て大衆神

事と毎仍ひ男女はかきうを覺心と救

まの安山開闢より延元庚申年と出

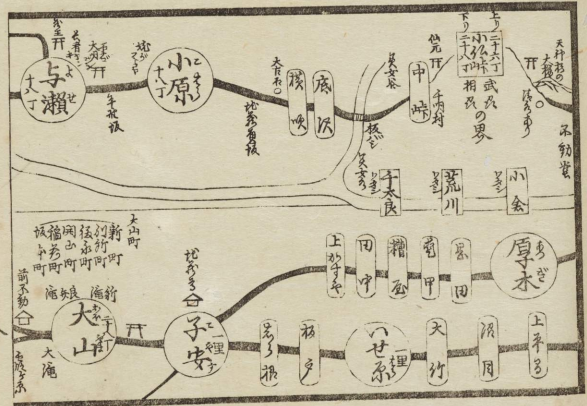
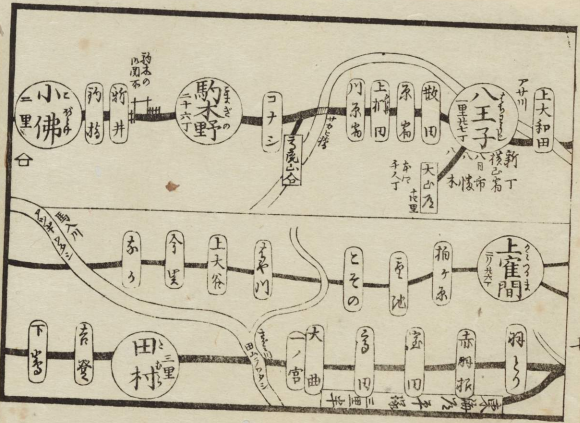
るまで三十七夜なり

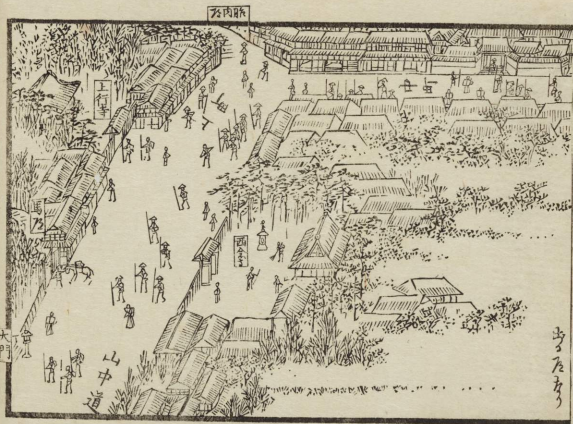
美山と有る後河の富士と稱して美
 系集山を赤人の談に元史に
 都良番の不二山紀にも皆後河山と
 紀せり山の表の向くを以て長谷
 地の理に抛て鋪きさへ山の東南加古坂
 の界より西北裂石上まで徧計十二里
 甲斐より西の地なり
 勝頼相匠の行願書に日本山なり
 富士と云ふ異名別は誇るといふも
 半の吾う甲陽の地なりといふ又映紀
 行小石実を列山の本別
 六の三駿と二と豆を一とを古人
 奔の甚き以て痛恨せしむべし

今の本沢の折敷を東麓を愉快の境

とのへ

又三五と誇るといへる古より誇ると
 稱しを鶴を傳へるなりといふも
 ひどく東南加古坂より西北裂石
 迄山の麓に甲斐の二玉を以て環抱し
 夏の間へをわらさるる初より
 人系系集る標出麻呂の分なども
 まに甲斐の二玉といふと誇る境とも
 美山へおまも論如く甲斐於高野八代
 那後河後東於富士於の二別は
 是の因廻る凡十九里計
 且て東南の南七里に後東於富士





十二
あつたなり

上香田村

此北の所の家八十六軒

櫛比びていと敷廢又天湖を隔て川に
此所多く竹あり
登山の人々先者村々所所の家々
あり山段浅を出し隣齊り山竹の
装ととのふ

不浄枝の材 三十二文

二合目波砂者賽浅 十二文

令剛枝の材 八文

二合目 三十二文

丸合目多層四橋 十口文

頂上茶所を嶽 二十文

右徳討百二十二文 是と山段砂といひ
て古昔の山上より手場くま玉つて

出せが今の一皮は所へ後一皮は
 山上不えんすの切きりと後きのとえんすは
 人の糖とうを首くく路ろ方ほう方ほう人ひと又また川かわ口ぐち村むら
 の所へ糖とうのちる者ものも此こゝに後のち洗せんの
 吉田村よしかのむら方ほうの所へ後のちき多おほく

定

- 一 所山後粉 百廿二文
- 一 所中後粉 令百七
- 一 所長山判粉 百八文
- 一 綿入秋粉 百 文
- 一 依藤 六十廿文
- 一 糸炭 廿十八文

一 所山紫肉 百 文

四 胎肉とら廿十八文づ

一 所中道紫肉 令百廿二文

一 所胎肉紫肉 百 文

一 所八海紫肉 令百廿二文

一 所系馬一足 二百廿十文

祖 胎肉とら廿十八文づ

一 所智鏡一挺 百 文

祖 胎肉とら廿十八文づ

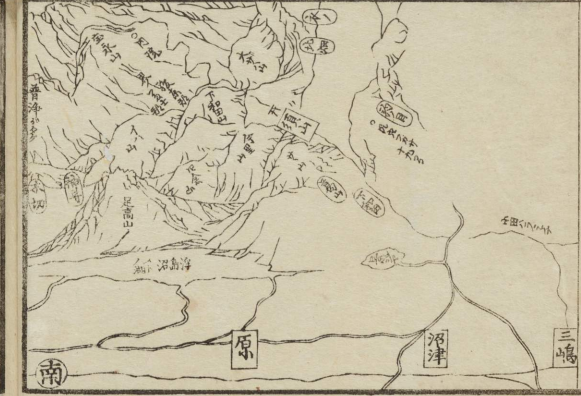
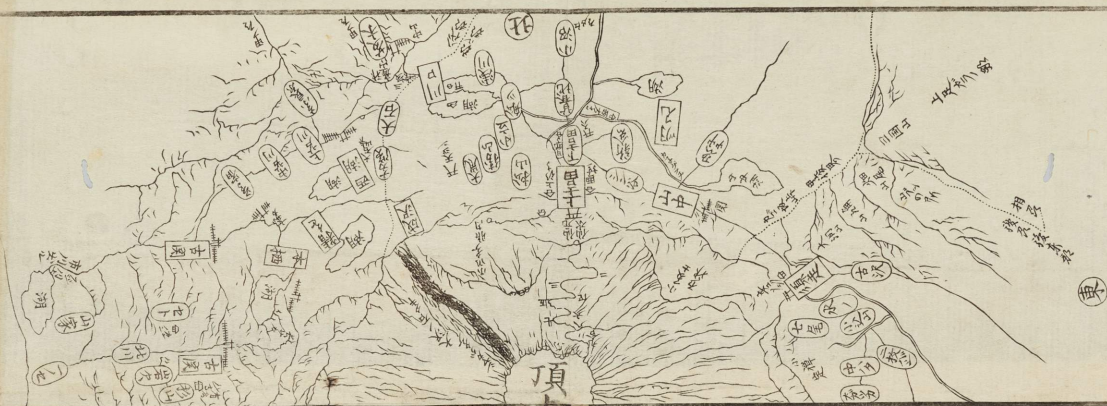
右を山内定例に初る所の為也初

山内

六月

惣付帳
奉行司





浅間社 上吉田村より側系に日上の申
の日の二念目より少るの社を上
の少るといふ村にて甚だそ

下の浅間といふ

祭神三坐 大山祇命 瓊々杵尊
本社受那姫命

社記 曰く本系横を以て其の時貞應二

年 遂立まるといふ爾後遺留の年月

詳有り元和元年小至て谷村の城

主も居た佐吉見と遣立まるとも居居

核封の後移元移津吉谷村の城とそ

なりて延宝六年まで遷立を移元移

移村の後八奇を普請とちるゆゑ不

村上光清なるもの京保八年二月志

と募り元文三年より再建の功と

果すと見世今人の社にて殿ありといふ

茨の紋あり八毛先法と定紋と

大門 下吉田の入口より十町せうの御

令燈籠八対 石灯笼八十三対

仁王門 是れ吉田村なる月に古指

洗川 是れ八海の一なる泉津より

出る所也又是より洗川と云ふ

石橋 是れ洗川の橋にして長き丈

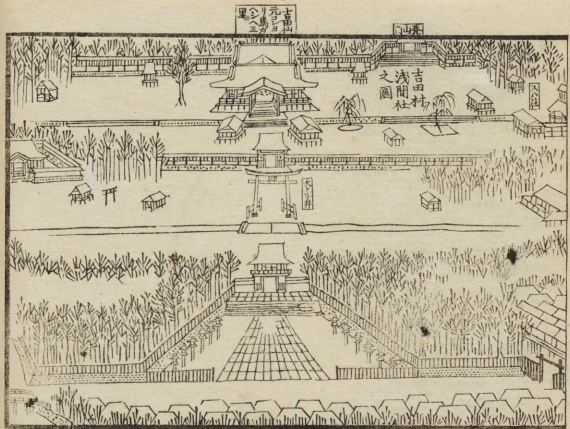
二又巾一丈一尺あり二枚石を以て架

石五極 縦は十二尺 横は三十七尺

大香居 是れ社地のふらりとゆいとも是れ

不二山の香居なり高さ六丈八尺程

のちきり高六尺七寸程間六尺



同新編紡社

名律 建御名方命

是ハ叡社の地主神也 布社のお

の方あり 例祭 七月廿一日 夜半焚町

神主

坊友

叡士登山門 叡社の初めあり 禰ま

國不二のふまなり 天祚二年お

鮮は春祭と書とる 断たり 又此所

より 珍あり 弘治三里修あり

新編紡社 宅山門を出てより十町ま

のりの松林をい

大堀 新編紡のありあり 是ハ宅山つそ

如く之町まあり 木の丘をい 又此地ハ

田本武蔵 不二山を遠 澤せとせり

一市以去りとて日礪は清くも飲
りり

北条路の板夫と平一以四子の
積威はゆくと不二の北口
目本武蔵の初 古場のよまらり

中の葉屋 此折の四方石板より升形
の如くそ度きも江戸の内門内身升
形と唱ふ折くぬふて葉後は株本
門あり見も江戸より六遠ひて唯
左右は柱を建てるのよ折は葉屋一
形あり一葉屋わら屋
○見より葉の葉屋は西の板肉た
ふらふら葉屋は出ひ

遊境 中の葉屋のさそふ

焼子板 中の葉屋より二町計より

裾掛 山の東南加古板の甲敷より北

裂石上まで十二里の石をつくの辺り

總て懐井より次第くよまらふれ

ども登る者もよまらふれ見入るもの

裾掛馬場 裾掛より十町より初

てまきまを初らるの地を古昔跡間れ

をれは流津馬より折なりし今

音雨てこのみなりとて又天正十七

年小山田依有の印書は一駒ヶ馬場

の上の鳴物古より活交のより此版

はれぬ者」とあまの古のひをまより頂

中本多の
上と昭物を標せしる

一合目 神社考

孝安天皇九十二庚申年六月不
 滑出の指の雲霞飛來て穀の集
 かゆと云ふは由て一糸を穀原山と
 稱する亦は山路を置るは升田と云
 すとつゝ又も此山の形平地は穀と登
 さか正凡糸は穀を量るふあをりて
 凡一里と二合と唱ふともい
 流糸又馬返 禍ケ馬場より通洲急
 若て流糸出つて山路へ入るこの辺の
 險阻よく馬蹄も及ぶと云ふは仍て
 馬返のあり又この地のまゝの石

時よ月を以て糸を以て初り
 林登者去流 永春糸新七 是の毎年七月
 朔日かの電を引て住居を掃り門
 口電山を以て敷小方を衣居新定ら
 び又此新より流糸大日世を以て町
 ざりりつて地はあつるれの時

流糸山は流糸川より馬場の西にあり
 其の麓に在りては古の流糸山と云ふ
 流糸川は途中に糸を以て流糸山と
 有る又糸を以て流糸山と云ふは
 流糸山は流糸川より馬場の西にあり
 其の麓に在りては古の流糸山と云ふ

漸復新の作法を後田法云々
上巻を成すに候に申すに不承
者有らば候に候に申すに不承
法に候に

六月

長久保
段人

本書は作法を既述し勿論山内元
鑄筋の氣筋を心付取らば其の
有らば其を用いたれば其の
作法の可なり其意を山内元鑄筋
及中根櫻と云ふ其意及申す
可なり其意を山内元鑄筋
其押並に申す可なり

其山所
年行司

○是より約ち小浜岳山長尾屋より
此道より月次本道至多きと此
少きと通といふ

大日堂主之三所

鈴系大日堂 系神 天照皇大神宮
九年 隆北三ノ口方
神皇 小佐新助若吏

神明社 大日堂の如くも小所り林

神系小所り
一合又少目の茶を賣らるる人歩

小云をりしと云ふ所あるに
頂上と云ふ所あり又此所あり

鳥居 此所はあり

御定院 石磨より少く是て平地を

う折を以古き六すなりしが冷の廢

址で地盤も高きなり又ウミのこの地

ありしを此も古田村跡多塔院清

光院の位持毎年六七五月のる愛ま

東院跡一七等念仏を執りせりといふ

二合目
小室浅間社 系神木花咲那姫命

社北西町四方又この社を上のはりといふ
神願十二石一併七合

岩社を貞觀七年十二月九日祀す布

小て山中元初の基立ちたり敷土の
か社よりといふともその壯麗多分

八古田村なる下の湧きの社に及び

又叢今の社を慶長十七年より庚子

佐多布敷として逆留をす折とといふ

日本武尊木像一軀 貞振寺運持園

津仍丈々二尺二十分ふそ形状ハ不動の

のどくたの長をさとして方の版まきえ

さき衣子の殿失せり云文作元年秋

夏必志湯山の住僧光実光実夏坊

なる月の逆立をとり舟面ハ刺せり

女騎合掌像一軀 丈一尺一寸作人の衣

逆立の年月女は洋あむむ

依去自利坐像一軀 面貌ハ不動尊の
どく衣子又軍扇を持ち左衣子持法
々抜ゆ

有鏡一面 徑四十七分 裏は神を誘
 付け八方に交まらばとも鏡をかく
 是を武田信玄の奇術とす
 雲霧の中は字を翻るは道とも一
 の星をふきおし不充鏡とも
 武田信玄の願書一葉

致白願書意疏者

晴信奥女北條氏政妻也産年廿
 年有延命則從志未成于夏六月
 長可接船珠と圓鎖比來
 士等苦痛難數如意後及不可
 有後者之急如清人

維時弘治二曆丁巳
 久土百九日大膳大夫北條隆信

神主 勝山村 小佐野山城

小佐野代郡右左村七郎山園守

没行者社 涉間の社のゆゑとあり

神主 御妻も亦同日まこと此所小没

儀場なり切るとす

以室に谷石 没の者の社なりわし西に登

りて 瀧に 杖十丈を一斤石あり上

ゆるふしそ 杖石くしさと石面小

空坎なり 徑二尺計り深き七八尺

是を以谷といふまこと此所より女人此

登山と標す

登山改新 爰は吉田村の山所勘定

て登山の者も人月十二文々々知る

見へ近來の月より山改新の外に

通祖神 此山改新より二所あり

て小登の内より

令別杖賣場 山田屋後を傍

あ家同一小家として杖あきの山改新

料八文の山所へ山改新として後一

より亦代りて法取て宜いといふ

是ハ別本の麻糸にて石とや少故

より竹の價を入して常々其の百文

位銭の八十文がりの後法つて精

粗長短のり長きの六又附るの

へは天位もありま中屋巡りの杖

より二房村のり是も焼糸あり

吉田口二合目改場

二合目 此軒茶屋とより茶屋二軒あり

茶屋茶屋茶屋の

通り 秋葉 飯饅 二村の羽織

ありと云へ元禄元年の若き世月行羽

仲あつたの若を蒙りて送立ひといふ

この小茶屋の内より

二合目 茶屋茶屋あり 井上茶屋

大黒天 茶屋の内より安島を

二合目

かり是より上の山を繋ぐ柱と云く
 梁と架し内へ板羽用ふ者一前は合
 を明して一ニヶ折を介するく焦石
 ぬたるとる者又磨き八二呂半を
 又み六呂あり者已八合目大小座を
 七八呂もろと一又皆小座の内は
 座もろ唯焦土の上小筵を敷く
 のとかりしが今ハ少一床なりて下々
 体真折と一上と油乾と云々と云と
 も折ハ座を寄小座と云々と云と
 又合目以上止篇料
 百十八文 油目料
 百十六文 版

一 八十文

一 六十文

一 二十文

一 十六文

一 百四十八文

一 百文

一 二十四文

一 二十八文

一 三十二文

一 二十文

茶屋の形あり

門前九方
右田舎茶屋

稲藪

右茶屋の内は安座は

糝

加少

雑煮汁

兵衛茶代

疾具換料

布とん

一膳巾

赤版

大りじ

小こじ

飯を削取
外川茶屋あり

茶屋の内は未並い
不効 あまのり

茶屋の内は洗水あらいのりある一ひとは
水みづは之これを茶ちや扱あ扱あより少すくき扱あ扱あ
は津つを扱あ扱あしてああ受うけあり

殺ころ場ばのりして切きりてとまこい折おりて
昔むかしの茶ちや屋やの人ひとは神かみ仕しを頂たかむせうは
今いまあり

茶屋の内は掛か流りゅうあり形状けいざうの平へい常じょうの
如ごとく裏うらは上かみ及および群ぐん馬ば脱だつ大だい工こう流りゅうありある
者もの承うけ縁えん二年にねん二十にじゅう之夜のよ集あつり流りゅうはひり
て流りゅうは寺てら附つけするより鏡かがみ背せは刺させり
是こゝの茶ちや屋やの土つち織おり居ゐると只ただ者もの空くう空くうより

御ごろひ内うちの処ところといふ是こゝより二ふた町まち程ほどを
菰こも森もり稲いな為な小こ祠たて 天文二年てんぶんにねん棟むね札しるしあり
大目おほめ堂どう

中ちゆう文ぶん沙さる社しゃ 叢そう社しゃの武ぶ田でん伝でん云いふる致ちき
の社しゃ小こて遠えん管くわん耕かう年ねん二十にじゅう文ぶん内ない傳でん
叔しゆく月げつ一いつ秋あき寺てら附つけの文ぶん書しょなり
神かみ皇みかど 小こ依よ母ぼ伊い勢せい坊ぼう

遥えん洋やう祈いのち 去こゝろよりよりいふをまへて想おも
ておこまといひて方かた本もと天てんをわひひ發はつ發はつ
乃すなはちさへさるまこと是こゝより上かみの毛けあり

とひて茶ちや本もとせせむ禽かみ獸け栖すまとせせ次つぎ
焦あせ衣え山やまをそへ險けん惡あくより一ひと歩ふみ一ひと難がた
今いま上かみ堂どう威いもも炭すす灰ばい方かたる小こ仍なほてまは

より下山がき者も又少まじうばゆ多おほ小
遠洋えんやう祈いのちあり

同蓮大菩薩どうれんだいはつぼさつ弘化三年こうかさんねん經きやうヶ嶽たけより

此祈このいのちへ安やす坐ます

別わか菱あし 吉田村きちだむら 上行寺かうぎやうじ

○この祈いのちの西にしの方かたはる赤あか帯おびなりて先まへ

檜ひのき吹ふといひて小こ嶽たけ山やま乃なりなり

經きやうヶ嶽たけ 是こゝハ乃なりより南みなみの岩いわ崖たけと云い此

祈いのちハ文ぶん永えい六ろく年ねん 日蓮上人にっぜんじやうにん妙法蓮華めうほふれんげ

經きやう一いつ於おとと不ふ字じ一いつ不ふ二にのの才さい履り又また埋うて

經きやうヶ嶽たけといと年ねん淺あまま又またささふふ八はち則すなは

是こゝ又またこの北きたを日蓮上人にっぜんじやうにん築つくたの地ち

よして茶ちや庵あんなりしが弘化三年こうかさんねん少すこ下した

の北きたへ核かくも

吉田村きちだむらあり法谷平内方ほふやひらうちかたありへ日蓮上にっぜんじやうにん

人ひとより遠とほううと文ぶん虫むしなり此法谷こゝほふやと云いつ

西にし所ところの子孫こゝろね今いま吉田村きちだむらに在あり

旅たび多おほ地ち一いつ百ひゃく日にちに仍なほ復また飯いひ飯いひに仁にん也なり

江加表えかへ懐なつか遠とほ今いま復また領りやう法ほふ多おほ遠とほ仁にん也なり

多おほ法ほふ多おほ既すで往むか法ほふ多おほ為な浪なみ人ひと雖なほ

空くう百ひゃく日にち送おくり法ほふ遠とほ然しかんんと云いつ受うけ

六む國こく之の比ひ類るい多おほ敬けい先せん飯いひ領りやう法ほふ多おほ

弘こう法ほふ法ほふ子こ飯いひ飯いひ人ひと多おほ悦えつ喜ぎ在あり

通とほ拔はく亦また可か有ありんと云いつ北きた東とう五ご對たい面めん

寺てら長なが想そう因いん塚つかと云い

村方より兼田叙徳より湖尾より折小陸
が下下階門一

甲別八ヶ嶽 亥ノ二分

依別浅る山 亥ノ八分

此地より低き山三町より二町

上別三玉峰 子ノ七分

所別日光山 子ノ九分

武別尾山 丑ノ六分

相別大山 寅ノ七分

江の菅 卯ノ二分

亀岩 素小突出る岩を只尾と形

状の相似ると以て名とす

烏帽子岩 亀岩の少し上よりなりと

寛保八年六月十二日此地小放て沙

者身福入定を定一ヶ所小栗後正

此地より上の倉険敷より定まる

路もたう人々をまたせて焦土の上と

歩沙の段に陸を砂衣と稱むる一歩

を魚ハ半歩進き雲霧を踏底より

生じて忽ち晴ると人々ハ忽ち曇り

大子堂 折倉村 義新寺持ち

八合圓 此所より甲民談及の境小と看

旧日は兼田み刺りり 兼田新脚

兼田信を兼田 兼田新脚

兼田新脚 兼田新脚

大杉倉 漢毛りと交りて一略と云

み辰とて言ふ旭の地上と離れんとは

ととき赤院と名の経び有映と

あり是と来途といふ又神祇考又真

觀六年秋白衣神女出現を其ひま

ひ松んで時火災揚て園先りり那

ち是と來つて日の清ふと是をこ

あつた見あふ

胸突 日の出より上をり共は險阻

必ふべし

香深四捨 胸突といは所は出これ

ハ其志をかくを立て石を敷り

階のどくちを石に投て附け

より

△頂上

園を一里をり小して教峯元立ひ

ねハ八系とて以て以て死後いと

そ投八方よりまてて此地不救多

安處を祈の仏徳のつれも六月朔

日正開小こをて建て七月二十七日

位舞ふひつて山上の古木小埋む

かくせき色ハ双色のくあふそを

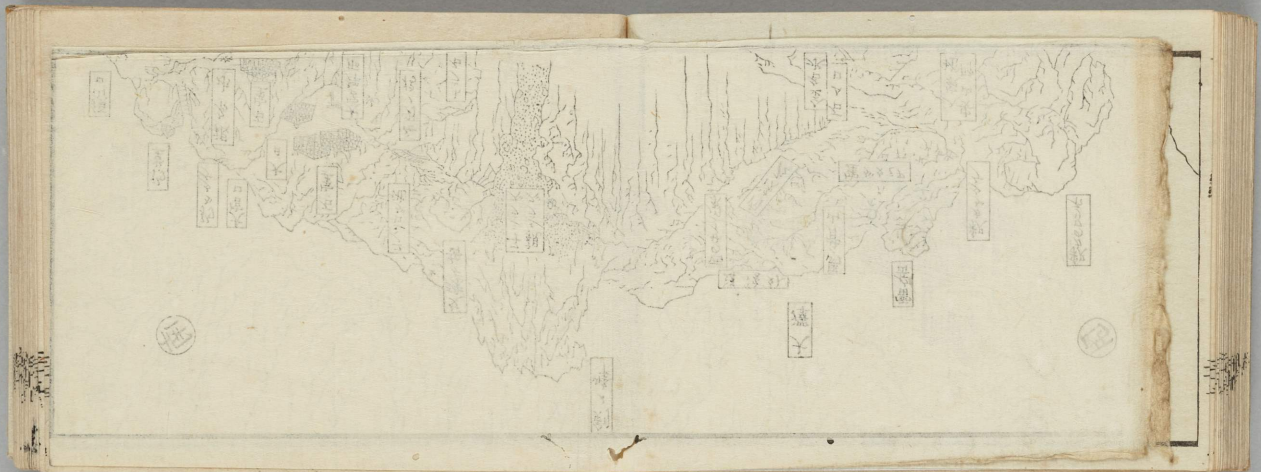
うたあう

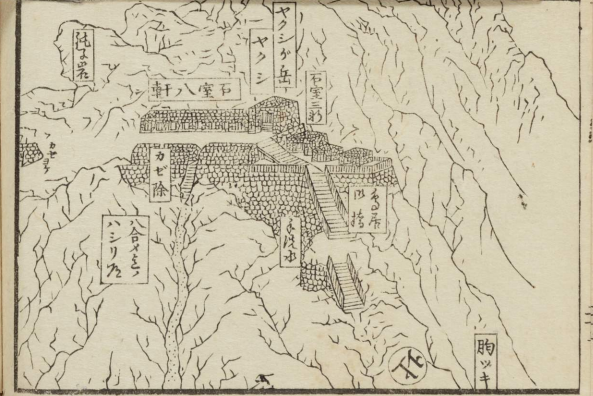
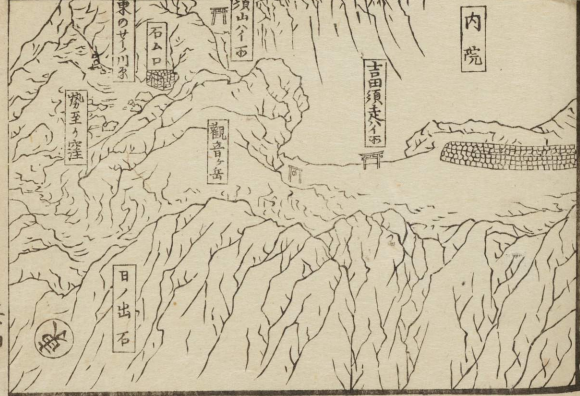
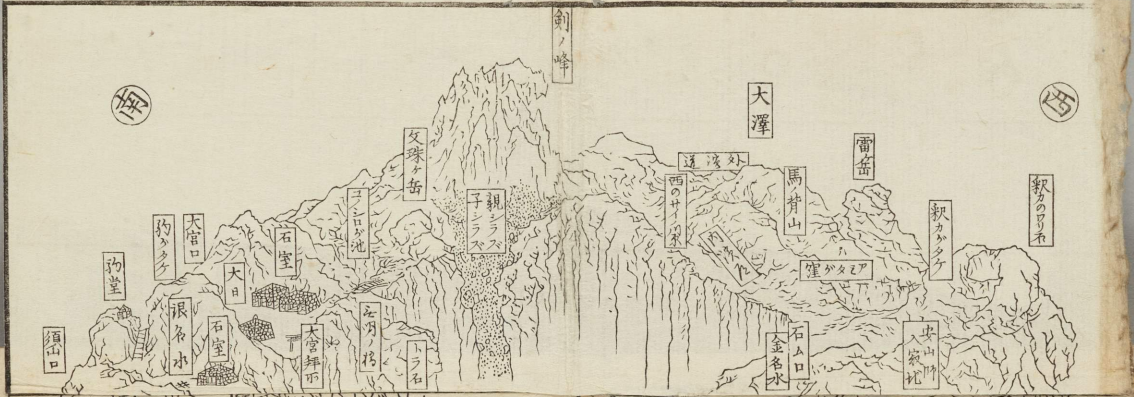
一ノ嶽 地茶

二ノ嶽 阿鉢陀

三ノ嶽 觀音

四ノ嶽 釈迦





似らぬと云ふ又都良香の記は頂
上地中又大石あり石積野奇あり
も虎の如しといひまはるる
形状より見て存付りたる

願目洞塔 細粒打場の少下あり

観音ヶ嶽 此地より寺を造る方位

相沢川の峯 卯ノ二分

豆沢天城山 巳ノ二分

十一面觀世音峽 観音ヶ嶽より

是の明倉二年尾張國の人建立す

大日像 月新あり是ハ洞首峽底の像

卯て大永二年尾張の山の人建立す

十彫付て是と観音と違ふ人

と六姓名矣今も寺に世新は銅花籠

りて寛文八年の銘あり

勢玉ヶ窪 此地より寺を造る法及方位

後沢沼澤 巳ノ二分

巨削下田淺 巳ノ六分

大峯 巳ノ二分

之宅峯 巳ノ五分

此新を烈風起る多りといひて諸

人は是を果てて逃が

東新の河原

須山新

銀名水 須山の新を造て徑一尺あり

その井のどろ物ありと是の旱天も
水のわづらふと是と銀水と云

又須山日より暫る老ハ此処へ出ると云

八子の階子 是ハ銀水なり 納嶽

へ登る階子なり

納嶽 七合ニ夕も此地有あり愛々

上官を子黒納の赤とて懸息あり

一旧跡といふ

納馬堂 納嶽のわづらなり

表大日堂 納嶽と南へ下りて所ハ

あり又右昔ハ大日堂の村邊ハ赤染ハ

より山段錢ニメ文大カ一あり 製炭一ト

ろの吾年吉田田所の死次と云々

村の城ニ納めるといふ事の後

河原と云うて吉田川に取村ハ所

共河原に取村ハ所ハ中成沢村

正徳六年の村記より云々

村邊大菩薩 是ハ段村の傍に

大日堂の内もあり 竹藪ハ村山の山

伏た後坊池の坊池は坊三人

又此堂にて登山の人々白飯の背小

印文と押さ

村山ノ宮 深新

大日堂の赤子室ニ新なり 若任屋敷あり

大日堂の赤子室

大日堂の赤子室

是ハ明徳二年 尾張國

西て流るる一彫材あり

虎石碑 凡のよふふ文字流きて漢

不動尊

不劫尊石像一軀

鯨ヶ池 是ハ六七五月のるハ内開れて空

炊とあり 及び後ありハ内開の時々

る流きて内院に入る 焦在るの月々

を衣持 是々鯨ヶ池に留るる 西の持

子のいと死持あり

交珠ヶ嶽 約ヶ嶽ハ子の階子よりと

れとのるハ村山持かふして東敷の

からとなりとの人

大日洞像一軀 剣の峯の棟よりらの

像ハ寛永元年伊都の人建てる

折なり 是等こふ 姓名を記し

今こことおふく

大日洞像一軀 因折よりらることハ延徳

二年の建てるなり

大日像 剣の峯の飯略あり

親若くバ 子若くそ 剣の峯の棟ハ

ありこのまの乃内院よりかき

身と其ハ砂石とより小牧千丈の内

院ハ

剣の峯 是ハ八景中最大一の峯

小くもさば十丈より又をく

ハ剣と云ふより法入陰を踏きて

多うの電らばまことこの山の巔より遠
小舟あり豆粒の海洋脚下ありて
此山は海中より元立まうと疑はる又
此山は神の悟りかんとて取
りて標さる花樹も石を持たて御
寺小丸留て弟をえし小使家又よ
初んべー

西舟の河系 兎の峯と下りて廻ふ
あり此竹より外溪及内溪の二
小より又東舟の河系より是を
不二流とす
外溪通 為舟の河系より馬背山
右より竹をえと又とへ雷嶽

へあつたありとらん

内溪通 西舟の河系より馬背山とた

小して程くをいふのなをやく者ハ
雷嶽及釈迦を嶽とあつて阿孫院
ヶ窪と有ふ方して令明名へ出

馬背山 内溪通と外溪の二より
雷ヶ嶽 外溪より此所へ出まこと上

八谷園の上の雷鳴りる方とらん
も若雷表中より發る方とらん
残るはあつとらん

阿孫院ヶ窪 雷ヶ嶽と嶽より所あり

釈迦ヶ嶽 阿孫院ヶ窪の先あり

大沢 兎の峯と釈迦ヶ嶽の別の敷

千丈の谷をいへ程さうくの中を巡る
の條下は等しく

新迦の割石 新迦を嶽ゆりりするさみ丈

さういふて砂路の上よのどに烈火を落

んとする勢なり中こわさうさう一丈才

あり煙石元として砂を挟み漸そ今

計為して中この色に厚きと見よと

へぞ岩下小水持あり

は地よりそを中を流るの方位

甲別所延山 西ノ西分

依んて鋼筋の洞 成雲ノ洞

飛鼠糸鞍嶽 西ノ九分

大日の掛鏡 割石のからりある岩の

中 smaller あり是の交電二年清る所へ

安山禪所入寂の地 久待鏡のある岩のか

くらくはあり是の延出六年六月は可

わて禪所入寂せしとといふ

久系入寂の地 安山入寂の地の少一下小

あり久系の後及守都支の械あり

か禪所の言法は威ト所は陸に地

入寂とといふ

令名水 久系入寂の地よりかー下ておの

くはあり是と令名水といふ法入行

筒ありはの徳利へ取らうて此と稱す

のの是たり又是の舎を四平方のといふ

者か開く所ありといふ

くゞ通 是の合衆よりありよりあり

茶竹の嶺の風除のまへへ出て定めて休

息一帯のまじの上へまじりまじりと

以て帯のまじりより大あつとまじり八

合目の登り乃を方よりえて一歩進れ

ば砂砾とす小毛より七八尺

はと死後より巨不轉び居るよりまじり

既よりある老翁より白く髪と初らす

みんそと道と笑ゆまじり巨不の者

小忽壓記せしる

叔夜是と笑面直の空場にて作き

外一試も杖を不る不入して体息は如

新しく八合目小あり又体息一更しより

一瞬投而身忽に合多砂よりひ小く

まて止む更しより下まじり小山登へ出

る存ま加まじり八中更まて初の方と下

雨と

脛内通 右内村の初の遊分より右へ入

るより一里半よりよりて空沃へ出て大

なり八町よりより右の洞あり是を脛内

とつ入るは流る大菩薩山院の洞あり

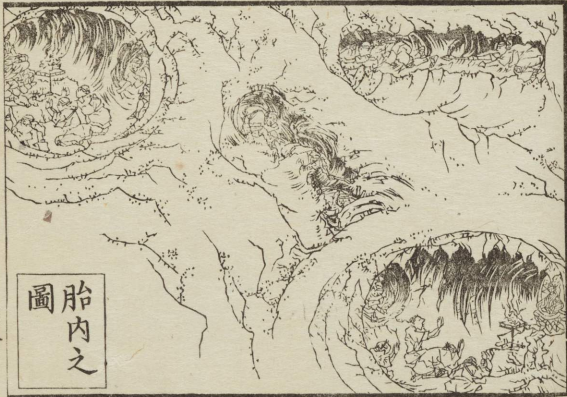
その石流るは僅小み尺秘肉へ入るて又

丈よりよりて旁より折して背向より

是より下て平より岩の上よりよりこの

所を子返るとつ見えより石よりよせま

く葡萄とて漸まをむはるを乳房の



圖胎內之

程



き岩あり是より十町を引ハ積ひろく
ありて進ニ安ク正面大目の洞縁と安
ち一是と湧るの本地伝とを又あり
又産の切と云岩あり其洞縁と積
多ら死と云て余とそまて鹽存あり
井と云小似て中ハ胞衣のどきあり
扱是よりハ突突として進む様ハ極
好と云て作き足是ハ岩石總て胸内
皆小ねいよう

洞上不大ある石地翁らう洞赤は砂屋
一字有りまて此地を大丹津村の持分
有て先火の中央と云て吾田村丹津村の
界といふ云ハ吾田友屋と云日の洞

くとの入是より登山する者ハ南へ五
町ざうり小と空法へ出て茶屋一軒あ
り又洞屋安あや又より二十町ざうり
ハ中の茶屋へ出り

又登山の人々吾田村系一なる目此
新へ結ぐて其目の吾田村へ帰る母と
目本あつて雲山まきるものもあり又是
より進み雲山まきるものもあうり又
吾田村は別の村は善治とされより

中の茶屋へ出ては二十町ざうり洞
空法へ出り是より胎内へ流る又中の
茶屋へ出りて雲山まきる岩もあつ

丹津道 中の茶屋より東へ八町計

水が湧水あり是と泉津といひて
 近茶八海の一不加人埋俗いとも古
 昔深頼朝卿家士の内将のゆ士率
 の喝を救んがさる他元の伝は新撰
 込のひ鞭を以て若上をさそりて水
 と治る人友仙瑞ともいふまこと
 水倍まを以て夜作の水とも云
 又この方の下流まは流る社の内は洗
 門へ出る
 旗掛松道 枕子坂より東へみ町あり
 小て方さみ抱解の古松あり向松
 とりひまこの頼朝の旗の松ともいふ
 この西の方小谷方さみ抱解の古松

内なる大倉居よりまきへぎ料ありと
 て倉居おといふ
 又株をうひまう是の下の流るの社
 小の嶽道 經ヶ嶽の下の為の方小倉居
 あり是小の嶽石をの一の倉居小
 て是より先と横吹といひて倉居基
 あり少いゆひの泉を湧りてまより二干
 又町ありゆひの大門の小倉
 小の嶽石を大権現社 社地二町
 桑神の坐 盛長振命 素盞鳴命
 藤原宮元光
 富士権現社 日本武尊
 西殿宮元光
 大神文社
 神主
 小佐井経賀

中通巡 依公堂園の老山の半腹と中を巡り

とついで中腹小角初よりといふむ古へ

山の半腹とたも定めを廻りといふ迄

年ハ大方定まりたりあり北口入合の窟

は中乃巡りの初老各ありて記も限有

りたり六合ヌタはあり東の方海をむら

み合目の窟と目取ぬ下り横山口六合目

の下を過り室水の頂へ登り以折

み及相といふ支よりたの方より下り室水の

焼出の口とをう下の雲注き処は下り此処は

十二神の窟といふなりこの洞窟を洋と

又方更の方へ下り下の方山の石小く

村山口ニ合ヌタはあり子酌より電より

み合目より大以の方と目取ぬは乃ちの

小免候といふあり又天の浮橋といふ石橋

ありとまの數十丈の谷の上は波せる一ツ

の大石小て大逆の石橋はたの奇觀と

此処の下の方冠石といふ大岩あり流る

懐といふ処も洞窟とあり一ツ二十人を

容る二ツ七八人を容る風ぬのと此くの

乃ちより香宿の処なり又より大流渡

り者一の後より不致岩といふ所小出此

折城を死座小下の方本立と下りとの

処を二つ出砂門岩と目取ぬは波る支々

と死流佛石はありこの流を丁ざりの

折山より山下を大小の石を神化れ

像と成さるる空木沃といふ小島
子比処下の方神の所をと稱する所之
是より小清岳も出て下山す

吳入中一札之事

一拙法儀心願す件也

清公若仍中道終仍信及仍衆務
の以祈禱奉叙の尤仍法而最高活
つ致の若く一山内小於て如何振
儀有之ゆに宜仍仍下下下下
吳入中一形也件

年月日
吳山より

國殿村
先達准

在中々巡りの秋書を以て以祈禱料と
りハ令を分りてまは法力の修練ハ
茶小奉とす

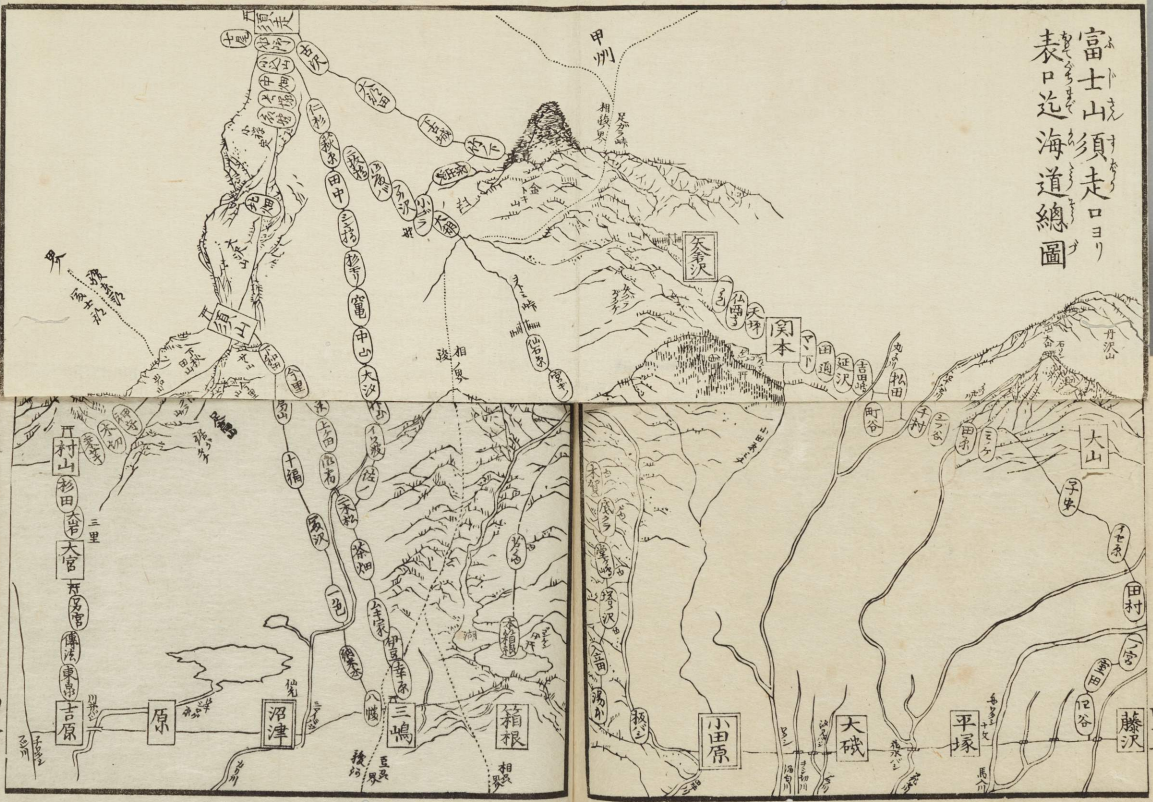
雲切不動明王 吾田に六倉又又目録也
の祈より南に又合目へ出て因に合目へ

下して茶を一軒のり是より左に十
町ざり合目ハ大階なり又之を登れば

空吹ありてその内は安坐とて祈の白
子なる(註)愛沢懸ちつといふ者寛政
六年六月廿日より二十八日一とて出

一とて又是より元の乃を登ると南
口合目へ出る

富士山須走口ヨリ
表口迄海道總圖



四十八里

四十八里

右へ附て登て古八左を頂上銀名水の折へ出

約門風元 瀬山村の右の方の磯村平小

あり口徑一里四方位少く下是の横入

日乃うる美へ入是の次者より廣くあらて三

里四方位をへ一又十町を出入はれり

わその如きもの多くして遊と難くその

海を計るべし代と久し十八町とせ

是てわくみと禁はといふ

大宮口 南口の一少く世折より世山を若

先不二郡大宮村へ出るとの地は木又湯

るあり折敷社を武内神社とて大園

の一の宮又總社と云ふなりとい

平城天皇の清守山を大宮より十町を此

大宮小移して西常立る大山根命と

合せ給ふせり人々後

嶮嶮天皇の清守山一位を授りて

長年る小まこと西造管なり神皇正統大

官用といひ別處を安禰院といふ是より

村山沙岡の社にぬる妻社ハ

景行天皇所守 日本武尊東夷征

伐のとき此地に於て渡河の織冠を

焼討んとせるとき木花雨邪邪は折敷

と入て給ふせり人々折敷ハ不二

郡村山の口大塚坊通り坊池坊あり

といふ是より二余圓は五にて左に雲切

不動寺乃あり頂ふ為ての表大
目堂の所へ出

浄土兌

此山は蘇我士の人穴ハ世の人のわす布
古書不出くハ東渡云々建仁三六月
三日將軍家渡御干駿河國富士
狩倉彼山麓又有大谷人穴為今
窺見其所被入仁田四郎忠常主
從六人云下界スル処を家士郡人穴
者とも猪頭穴作とも云竹あり人穴者
の任人赤比菅存つといふ其の天山十一年
五月甲斐津陣の功也此地並場
是て今此村長々此人穴もそ赤池氏の

後房とも処少て流づ者ハ此亦小者て
汲流と収りむ

洞口の甲斐不通大及の北の方より
小倉屋あり穴のりゆ右傍あり石階と
かりて穴は入り口の傍に一石あり入
口はひくしや入く中云はるよりそのさも
二つありありあり又六十七石ありの処
も有り中六天は方小穴有り乃者この
目も処あり入るや二丁より小ハ穴狭く
あり是より奥へ入るや地元の木本と二
つはなへてやまを歩ゆき其の本と浦
まのせが水梯不及ひとの冷ちるも氷の巨
穴の左右洞傍石像あり景内者萱成

東て松明を又此内の石を削を削へ出を
 と掃く穴の口より内北の側より大目堂
 へ石者角の石処まで死せしめてその
 石の堂より角の墓を堂の内北にお
 して其を葬りて其の墓を築きありこの石
 石祠あり角の墓を築きありこの石
 希長崎の病にて正徳二年丙戌六月之日
 死す此年百六才にして又
 吉田より此処へ遷り九里本柄より四里
 丁なりこの所より自糸流へ一里八丁大
 へ遷り六里あり
 又この所より其角の墓の地にして其
 石祠あり其地は其の石祠あり

白糸流

水添へ川に精進本柄等の湖多
 小之流して其頭村を照すの境内の一
 原水となりて此所へ落り大淵下は其地
 救りの石糸の石を流して其の石を
 附するをみる一且此水は其の軍菜小て
 も絶えず長く其村を經て家士門
 へ落るとつらの北糸を流して其の石
 流の石多あり

この地より人元へ一里八丁外神へ二里大
 一里へも二里あり

外神 凡元 北山本門寺大門の横を流
 きて曠野中杉の大本所より布を流り元

白糸瀧



の深さハ僅十間ありと久とも異中
 雲あり是と珍し海菜所産と
 て亦不花抗ありとの処ありと二里
 不ハ二ハ法ハ糸ハ八ハ神ハ

一々 巖

二卷

三痔

四峯

五崩

六嶺

七峯

八嶺

不ハ二ハ八ハ海ハ

天照皇大神宮

熱野大権現

伊豆大権現

白山大権現

水戸山王大権現

麻峯大権現

三石大権現

箱根大権現

明見湖 甲辰辰島龍明見村あり旧
 祭を阿柄湖といふことの湖を里俵清
 氏神といふ小瀬あり是より一里此所
 たり山中へ二里又忍茶小八湖へ去里忍
 茶より山中へ去里
 山中湖 同龍山中の関の傍ありあり
 階牛湖といふ形の湖を必て衣付一
 方より早茶小の湖へ群牛と驅入る
 ぬをてまはれ忽檢なりといふ又里俵あ
 湖を佐茶神といふ所の新あり吾田村
 へ二里旧丁様橋水深小く多入り海へ
 入るを一月の用水はあり
 川口湖 同龍川口村あり里俵とて水

只新神といふ甲辰身の大湖小く湖を
 たり不二山と眺をまはれはるありま
 たり
 〇表新に浅る社あり吾大新小く神
 王宮下氏所職殺十形あり又甲辰よ
 〇登正まはる茶八の板神まはるの地ま
 たり山所の新小茶一是より大茶長深
 をへてわくはへて腹内をを出さ吾田
 村より新へ二里の湖へ去里
 両の湖 同龍八代郡長濱村の湖あり
 旧茶花湖といふ海中小瀬あり墨石
 炎藤なる所より人谷て石花をいふ甲
 辰一の大湖あり里俵を木茂神といふ

また湖中を向うへ一里渡む岩面渾植
の傍を画けり是へ菱根小舟の登岸あり
り是より精をへびく乃をまき木を築こ
云精進湖へ一里

精進湖 同八代郡精を村より四本

割内湖といへ里俗の湖をいせ神神と

り八代この湖も貞觀年中凶賊のい死

流不湖を埋むる千餘丁今ハ一隅

を存すといへ此湖より舟柄湖へ一里

舟柄湖 同郡舟柄村あり里俗古根

流神といふと此湖は夜武神の社あり

孝安帝叡山を因せりといへ此の湖

鏡ありといふ系後日月初の中の日見

より志比礼湖へ五里

志比礼湖 同郡山形村あり里俗尾

碓氷神といふ是の精進より西の方古園

を下り五里小く山の中腹あり是より

又精を小降りあり

斗ご島よ山下下り市川へ出て菖川へ渡

り里廻山へ系結きより末もかり

又舟柄より根系へて人元村へ出り一里

八丁より吉田村より直り九里馬廻り

侯へ武末ト二百文あり

泉澤湖 里俗仙も新神といふあり

吉田村より雲山乃の勢ふるよりくある

せがこ小界まで

其後赤坂瀬戸湖を合せて八浦といひしが今この下と加て瀬戸湖をのぞく

中々此湖も深き子赤の深き湖多かり

今この田地を考て僅ふその形を存す

のこ

若菜二山の山子院ありと今今巡り

そそ成八海巡りといふもこれとも皆山時

の小路を多のりて中赤の山内と積

私記

若菜村 明見より二里東南より

朝日渡名社 若菜山大日院

八湖

出口池 浄冷池 底接池

桃子比 涌く池 階り池

七 コシロ池 葛藤池

同外八海

修湖園波分那二見海

近江園波分那竹中著

桐撰園足柄那箱根湖

依依園浜坊那流坊湖

上野園群馬那播名湖

下野園那賀那日光湖

遠江園城東那依奈湖

常陸園麻沸那鹿沼湖

山中の治

登りてを さへ 下りてを 毛海

富士山道知留邊後編 横本 一冊

此書の南大宮口須山口須山を以て頂上と
 示す所は神社公園の山頂より頂上
 までありて
 其の若編小渡り各所旧跡をとりて
 あり

富士山各所圖會 大本 五冊

通和名をの書脱不上持てそのあり
 知りしとよども九牛の一毛を
 畧記せしとあるは作者の力不三
 山小角ら發して各地の支圖を撰し神
 社仏閣の縁記を用ひ宝物等と撰家
 一冊にこの書小なりてて富士山中
 のこと人もさきあり其の要不もつる
 事ハ然書と考訂してのさく流傳
 ところ

東 都 書 林

須原屋茂兵衛
 山城屋佐兵衛
 須原屋新兵衛
 須原屋佐七
 和泉屋吉兵衛
 播戸屋勝五郎
 槐屋伊兵衛
 出雲寺萬次郎
 和泉屋金右衛門
 菊屋幸三郎
 須原屋伊八
 田中屋喜三郎
 浅倉屋久兵衛
 英紙屋文藏
 岡村屋徳八
 雁金屋清助



富士山道知留邊後編 横本 一冊

此書の南大宮口須山口須山を以て頂上と
 示す所は神祇公團の山もさき
 手前若編小波を各所旧跡とす
 ちり

富士山各所圖會 大木 五冊

通和名色の書脱不上持てそのあり
 知るといども九牛の一毛を
 畧記せしめたる作者の及べ不
 山小角ら登りて其地の志園と撰し神
 社仏閣の縁記と同一宝物等と撰家
 一と云ふこの書小なりて其富士山中
 のといふ人もさきあり其條爰小しと
 多し其書と考訂してりさく波向
 となし

東 都 書 林

須原屋茂兵衛
 山城屋佐兵衛
 須原屋新兵衛
 須原屋佐助
 岡田屋嘉七
 和泉屋吉兵衛
 播屋勝五郎
 槐屋伊兵衛
 出雲寺萬次郎
 和泉屋金右衛門
 菊屋幸三郎
 須田
 浅田
 英紙
 岡
 雁

Handwritten notes on a slip of paper, including the characters '大' and '美'.

